



ガビン先生と

楽しく

学ぼう

日本の

古典文学

第一卷

1

① 令和元年十一月二十九日（金）

「元号『令和』記念 初めての万葉集講座」

「令和」の由来

○ 令和二年 五月二十二日（金）

日本の四季と古典文学 春の章

※感染症予防対策のため中止

② 令和二年 七月 三日（金）

「日本の四季と古典文学 夏の章」花を中心に読む

③ 令和二年十一月 十三日（金）

「日本の四季と古典文学 秋の章」花を中心に読む

④ 令和三年 二月 五日（金）

「日本の四季と古典文学 冬の章」花を中心に読む

テーマは

季節の「花」

令和元年十一月二十九日（金）茂原市総合市民センター

茂原市社会福祉協議会事業

新元号「令和」記念 初めての万葉集講座

その 1

◎ 新元号『令和』の意味とは？

☆ 当時の安倍首相の談話より

人々が美しく

心を寄せ合う中で

文化が生まれ育つ

春の訪れを告げ、

見事に咲き誇る梅の花のように

一人ひとりが

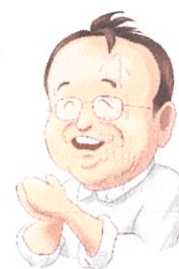
明日への希望とともに、

それぞれの花を

大きく咲かせることができる。

そうした日本でありたい

と願いを込め、決定した。



天平2年(730年)正月13日

正月の祝宴の華やかさ

福岡県太宰府の長官(大伴旅人)宅で梅花の宴

外交の入口の役目+海外との文化交流の窓口

梅|| 中国から渡来した流行の最先端の花

漢詩の文化 花と言えは「梅」

貴族の教養+政治とのつながり

宴会ではあるがドンチャン騒ぎは無い

藤原氏の陰謀により、左遷 「長屋王の変」

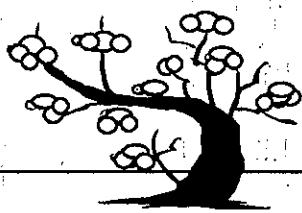
『あのころは たのしかったなあ...』

我が園に 梅の花散る

ひさかたの ^{あめ}天より雪の

流れ来るかも

大伴旅人

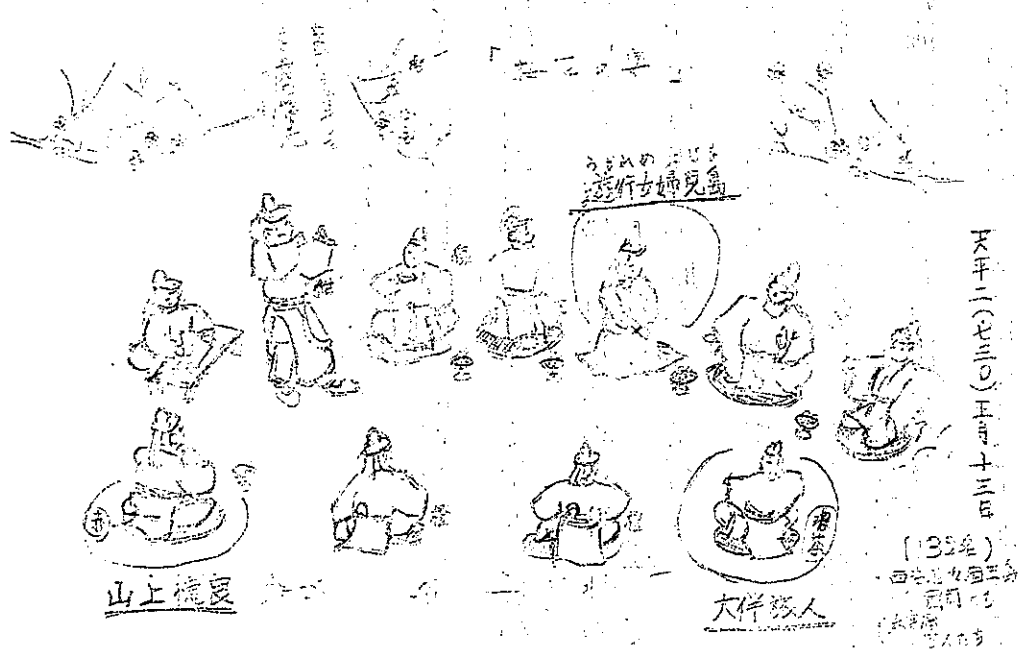


『なかなか 人とあらずは 酒壺に なりにてしかも 酒に染みなむ』

なまじつか人として生きていないで 一生涯 酒に漬かっていたいものだ
大伴旅人

天平二(七三〇)正月十三日

(133年) 西暦七三〇年 正月十三日



梅花歌卅二首并序

(序文) 中国の詩序をまねる ↑ 「蘭亭集序」 王羲之おうぎし

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅申宴会也

于時初春令月氣淑風和

梅披鏡前之粉蘭薰珮後之香

加以曙嶺移雲松掛羅而傾盖

夕岫結霧鳥封穀而迷林

庭舞新蝶空帰故鴈

於是盖天坐地促膝飛觴

忘言一堂之裏開衿煙霞之外

淡然自放快然自足

若非翰苑何以據情

請紀落梅之篇古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

梅花の歌、三十二首と序

天平二年正月十三日、

太宰の帥旅人大伴旅人の邸宅に集まつて宴会を開く。

折しも初春の正月の佳よい月で気は良く風はおだやかである。

梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は匂い袋のように香っている。

そればかりではない、
夜明けの峰いただきには雲がさしかかり、松はその雲の羅ベールをまといつて蓋ふたをさしかけた

夕方の山の頂いただきには霧がかかって、鳥はその霧の穀うすきぬに封じ込められて林の中に迷っている。

庭には今年生まれた蝶が舞っており空には去年の雁が帰って行く。

そこで天を屋根に地を席むしろにし互いに膝を近づけ酒杯をまわす。

一室の内では言う言葉も忘れるほど楽しく和やかであり、外心の大气に向かつて

さっぱりとして各自気楽に振る舞い愉快になって各自満ち足りた思いでいる。

もし文筆によらないでは、どうしてこの心の中を述べ尽くすことができようか。

諸君よ、落梅の詩歌を所望したいが昔も今も風流を愛することには変わりがないのだ。

ここに庭の梅を題として、まずは短歌を作りたまえ。

『萬葉集』

「梅花歌卅二首并序」

天平二年正月十三日、
 萃于帥老之宅、申宴會也。
 于時、初春令月、氣淑風和。
 梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。
 加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋、
 夕岫結霧、鳥封穀而迷林。
 庭舞新蝶、空歸故鴈。
 於是、蓋天坐地、促膝飛觴。
 忘言一堂之裏、開衿煙霞之外。
 淡然自放、快然自足。
 若非翰苑、何以據情。
 請紀落梅之篇、古今夫何異矣。
 宜賦園梅、聊成短詠。

梅花の歌、三十二首 并せて序

天平二年正月十三日に

帥老の宅に萃りて、宴會を申べたり。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ。

梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薰らす。

曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて、蓋を傾け、

夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。

庭に新蝶舞ひ、空には故鴈歸る。

ここに天を蓋にし地を坐にし膝を促け觴を飛ばす。

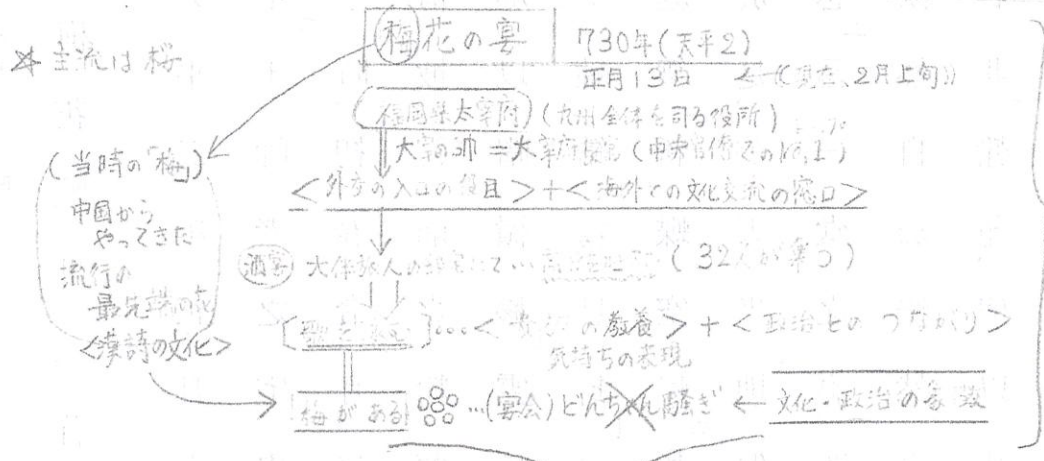
言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に聞く。

淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。

もし翰苑にあらずは、何を以てか情を據べむ。

請はくは落梅の篇を紀せ、古と今と夫れ何か異

園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。



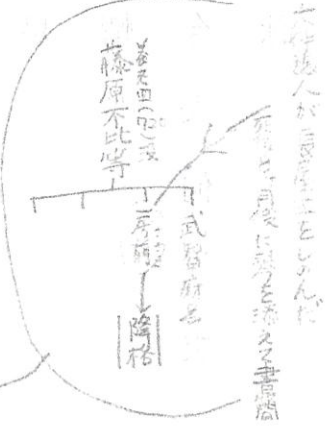
正月の祝宴の華やかさ

<後時代化>

70 天平元年 長屋王の変
 正月十日 田井 左大臣 長屋王
 二月十日 藤原 藤原を陥れる節
 二月十一日 元元 皇子とともに自刃

822 大伴旅人 「万葉集」
 我が園に 梅の花を散る
 ひさがらの 天より雪の
 流れ来るかも

823 大伴旅人 梅の花散らとほいつく
 しかすのくにこの城のよ
 酒を酌りつつ



梅の花散る

大式(大宰府首座次官)

[816] 小野 老

少式(大宰府座次官)

梅の花散る

[817] 栗田 人?

(大宰府座次官)

人上?

梅の花散る

[818] 山比 懐良(筑前守 大夫)

若の御事

[819] 大伴 首座名?

(大宰府座次官)

梅の花散る

[820] 葛井 大成

(大宰府座次官)

梅の花散る

[821] 満哲

(大宰府座次官)

梅の花散る

梅花酒世三首并序

天平二年正月十一日 萃于師老之宅

甲宴會也 于時 初春令月

氣淑風和 梅枝鏡前之粉 蘭蕙

韻後之香 加以 踏履移雲 松樹

覆而傾蓋 夕地信霧 鳥封穀

而迷林 庭舞新舞 空歸故雁

於是蓋天生地促 膝飛觴

合阿米都知能 等母余比佐斯父 伴比都葛等

許能久斯美多麻 志可志家良斯母

右等傳言 那珂郡伊知御菜嶋人

建部牛麿是也

云然の共まひりて 三言ひ能可

この奇魂敷りて 三言ひ能可

在の事をも傳へ言ふは 那珂郡の伊知の

御家島の人 建部牛麿なり

(王假名)

大伴 旅人 [822]

梅の花散る 雪の流る

よきおたの

あめよりゆきの

なづれくるかも

わがそのに

うめのはなちる

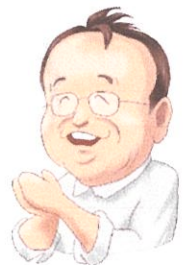
茂原市社会福祉協議会事業

ガビン先生と楽しく学ぼう

「日本の四季と古典文学」

花を中心に読む

その 2



令和二年五月二十二日（金）茂原市総合市民センター

「春の章」

感染症拡大防止対策のため 中止

令和二年七月三日（金）茂原市総合市民センター

「夏の章」

むかしおとこありけり

そのおとこ身をえうなきものに思ひなして京にはあらし

あつまの方にすむべきぐに求めにとて行きけり

もとより友とする人ひとりふたりしていきけり

みちしれる人もなくてまどひいきけり

みかはのくにやつはしといふ所にいたりぬ

そこをやつはしといひけるは水ゆく河のくもてなれば

はしをやつわたせるによりてなむやつはしといひける

そのさはのほとりの木のかけにおりゐてかれいひくひけり

そのさばにかきつばたいとおもしろくさきたり

それをみてあるひとのいはく

かきつばたといふいつもしをくのかみにすゑて

たひのころをよめ

といひければよめる

昔、男がいました。

その男は我が身を必要のない者と思ひ込んで京にはおるまい。東の方で住むのに適した国を探すためと思ひ出かけました。以前から友人として知っている人、一人二人と一緒に出かけました。一行には東国の道を知っている人はいなく、迷いながら行つたのでした。ほどなくして三河の国の八橋という所に行き着きました。そこ八橋と言つたのは水が流れる河が八方に分岐しているのので、橋を八つ渡してあることに基づいて八橋と言つたのでした。一行はその沢のほとりに木の陰に下りて座り乾飯を食べました。その沢には、かきつばたがたいそうすばらしく咲いていました。それを見て一行の中のある人が言うことには

『かきつばた』という五文字を和歌の各句に置いて

旅の気持ち詠みなさい

と言つたので詠む。

から衣きつつなれにしつましあれば
 はるはるきぬるたびをしそ思
 とよめりければみな人かれいひのうへに
 なみたおとしてほとひにけり

からごろも
 きつつなれにし
 つましあれば
 はるはるきぬる
 たびをしそおもふ

※

参考

枕詞 からごろも (唐衣)

序詞

きつつなれにし完了過去 (着つつなれにし)
柔らかい
馴れ親しむ

唐衣の縁語

妻 裾の袂 つまし 強調 あれば 接助

はるはるきぬる

掛詞

着物を 張る 張る 遙遙 来 完了

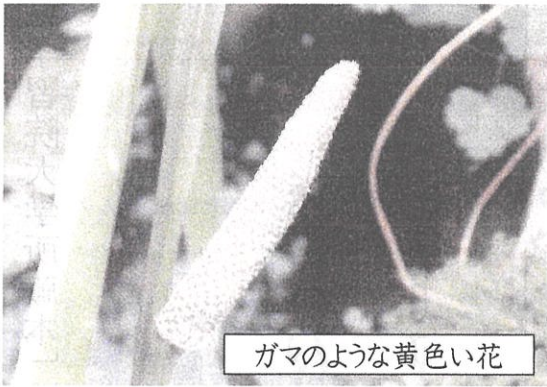
たびをし 副助 係結 ぞおもふ

連体形



日本語アクリロニム

何度も着て身になじんだ唐衣のように
 長年なれ親しんだ妻が都にるので
 その妻を残したまま
 はるはる来てしまった旅のわびしさをしみじみと思
 うのです。
 と詠んだので、みな乾飯の上に
 涙を落としたので、乾飯は、ふやけてしまった。



ガマのような黄色い花

しよづふ Ⅱ あやめぐき
 菖蒲湯
 葉を湯に入れる
 無病息災
 万葉集 卷十 1925
 「ほんぎす
 いしふ時なし
 あやめ草
 かつらにせむ日
 こゆ鳴きわたれ」

いづれ あやめか かきつばた (美人をたとえる表現) 「太平記」



『あやめ』
 5月上、中
 葉の主脈不明
 30cm、60cm
 乾いた所
 花は紫(まれに白)
 「文目」
 花の元に網目模様



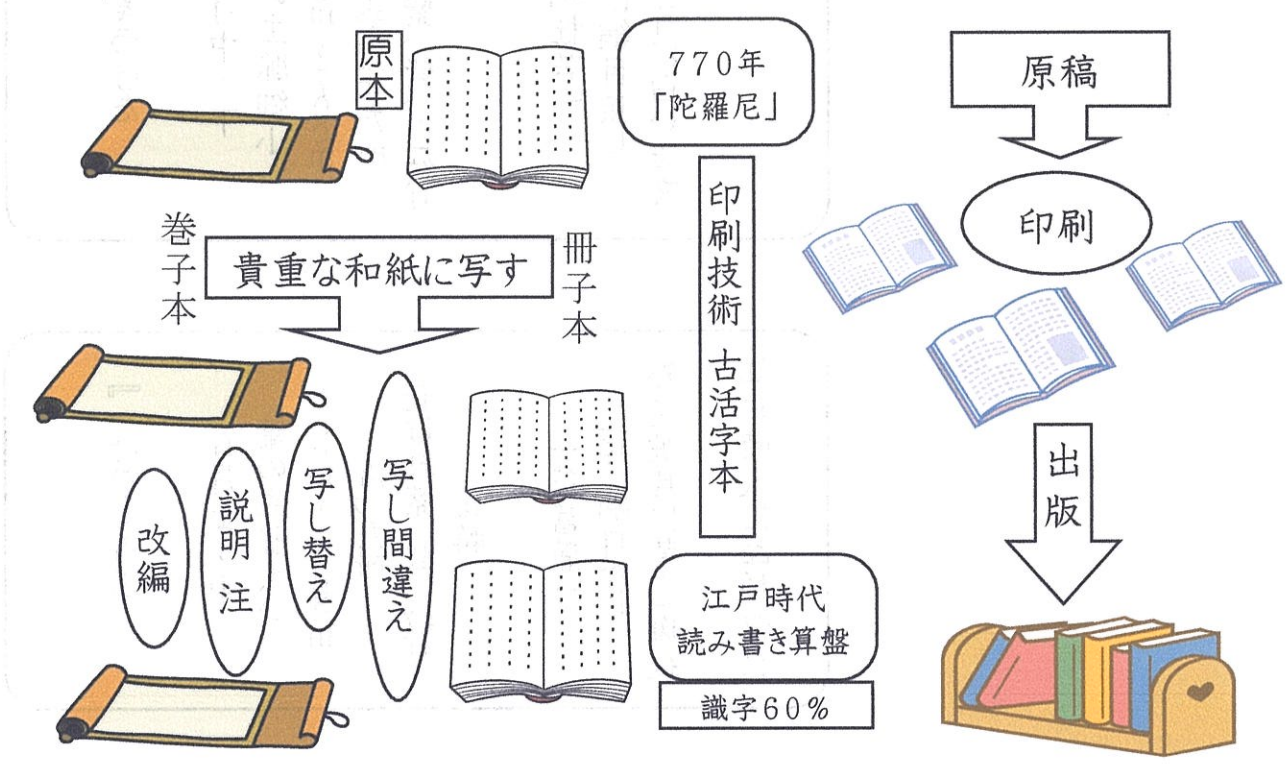
『かきつばた』
 5月中、下
 葉の主脈細小
 50cm、70cm
 水中や湿った所
 花は青紫、紫、白絞り
 「杜若」
 花に網目無し
 外花被片に白い斑文



『はなしよづふ』
 6月上、中
 葉の主脈太い
 80cm、100cm
 湿った所
 花は紅紫、紫、絞り
 覆輪
 「花菖蒲」
 花に網目なし
 外花被片に黄色斑紋
 江戸時代に品種改良

世務物語九(二)写本

うのまほやかづまる伊とおもしうく
 ほきもろれをば見てあま人のいそぐ
 いきつたたとふ、流きーをふみよ
 すへてきひのいとよんといひたれはゆる
 から衣まつまな。し流りあれい
 まろくきぬるをむをう思
 とよめくねんみる人かれいのの
 へよなみむたしてあひまわ



あじさい (紫陽花)

狭義のアジサイ(ホンアジサイ)は、日本で原種ガクアジサイから改良した園芸品種で、ガクアジサイに近い落葉低木。6月から7月にかけて開花し、白、青、紫または赤色の萼(がく)が大きく発達した装飾花をもつ。ガクアジサイではこれが花序の周辺部を縁取るように並び、園芸では「額咲き」と呼ばれる。ガクアジサイから変化し、花序が球形ですべて装飾花となったアジサイは、「手まり咲き」と呼ばれる。

アジサイの語源ははっきりしないが、

最古の和歌集『万葉集』では「味狭藍」「安治佐為」、平安時代の辞典『和名類聚抄』では「阿豆佐為」の字をあてて書かれている。

もつとも有力とされているのは、「藍色が集まったもの」を意味する「あづさい(集真藍)」がなまったものとする説である。

「集まって咲くもの」とする山本章夫の説(『万葉古今動物正名』)、「厚咲き」が転じたものであるという貝原益軒の説がある。

花の色がよく変わることから、「七変化」「八仙花」とも呼ばれる。

日本語で漢字表記に用いられる「紫陽花」は、唐の詩人白居易が別の花、おそらくライラックに付けた名で、平安時代の学者源順がこの漢字をあてたことから誤って広まったといわれている。草冠の下に「便」を置いた字が『新撰字鏡』にはみられ、「安知佐井」のほか「止毛久佐」の字があてられている。

和歌

万葉集には二首のみ。

「言問はぬ 木すら味狭藍

諸弟(もると)らが 練の村戸(むらと)にあざむかえけり (大伴家持 卷四 773)

「紫陽花の 八重咲く如

やつ代にを いませわが背子 見つつ思はむ(しのはむ) (橘諸兄 卷二十一 4448)

平安後期になるとしばしば詠まれるようになった。

「あぢさゐの 花のよひらに もる月を

影もさながら 折る身ともがな (源俊頼 『散木奇歌集』)

「夏もなほ 心はつきぬ あぢさゐの

よひらの露に月もすみけり (藤原俊成 『千五百番歌合』)

「あぢさゐの 下葉にすたく 螢をば

四ひらの数の 添ふかとぞ見る (藤原定家)

俳句

俳句では、あじさい(紫陽花)は夏の季語。

現代では多くの作品が詠まれている。



あぢさゝの 八重咲くごとく
 八つ代にを いませわが背子
 見つつ思はむ

あぢさゝの 八重咲くごとく
 八つ代にを いませわが背子
 見つつ思はむ

言問はぬ 木すらあぢさゝ
 諸戸らが 練りのむらとに

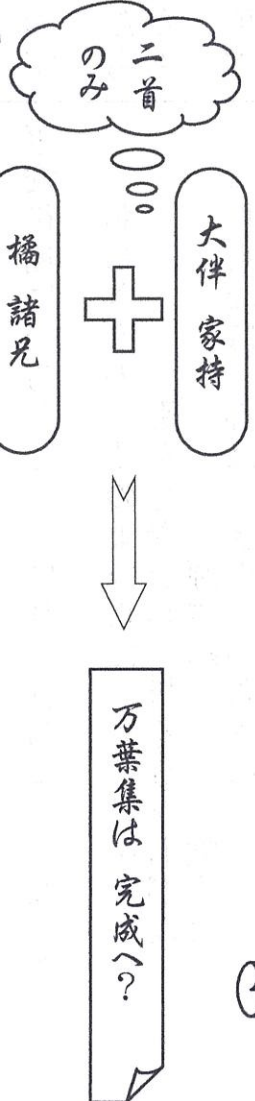
言問はぬ 木すらあぢさゝ
 諸戸らが 練りのむらとに

物言はぬ木とてえ
 諸戸の巧方。占いの言身。私。

（諸戸の巧方。占いの言身。私。）

（中世の世に）
 諸戸の巧方。占いの言身。私。

あぢさゝの 八重咲くごとく
 やつ代にを いませわが背子
 見つつ思はむ



言問はぬ 木すらあぢさゝ
 諸戸らが 練りの村戸に
 あぢさゝかえけり

「秋の章」

令和二年十一月十三日（金）茂原市総合市民センター

▼新元号「令和」記念

はじめての万葉集講座

11月29日⑩10時～11時／内容＝
令和の出典として話題になった万葉
集。万葉の世界に触れてみませ
んか？／対象＝市内在住・在勤者／定
員＝50人（申込順）／講師＝青少
年指導センター 伊藤雅敏所長／申
込＝10月28日⑩9時～電話にて。

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！

日本の四季と古典文学～春の章～
5月22日⑩10時～11時／講師＝伊
藤雅敏先生／対象＝一般／定員＝
50人（申込順）／申込＝4月15日
⑩9時～電話にて

総合市民センター

☎(24)9511 ㊟(23)7444
⑩原則として祝日および年末年始

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！

日本の四季と古典文学～夏の章～
7月3日⑩10時～11時／講師＝伊
藤雅敏先生／定員＝50人（申込順）
／申込＝5月22日⑩～電話にて（9
時～17時）※土日可／秋・冬の章
と続きます

総合市民センター

☎(24)9511 ㊟(23)7444
⑩原則として祝日および年末年始

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！日本の
四季と古典文学～秋の章・冬の章～
11月13日⑩（秋の章）、12月11日⑩
（冬の章）10時～11時30分／講師＝
伊藤 雅敏先生／定員＝25人（申込
順）／申込＝9月17日⑩9時～電話に

広報「もばら」の募集欄

春 59%

秋 41%

- ・寒く冷たい冬が終わり暖かくなる
- ・生命の息吹、躍動を感じる
- ・明るい時間帯が長くなる
- ・身も心も明るくなるように感じる
- ・花見が好き

- ・暑い夏が終わり涼しくなる
- ・おいしいものが増える
- ・心がしっとり落ち着く
- ・紅葉が好き
- ・旅行、野外活動に最適

紅葉した葉を手に取り愛でることができると秋こそが...
鳥が鳴き、花が咲く春も良いけれど

- 花見
- 旅行
- ウォーキング
- 園芸、畑仕事
- ピクニック
- 山歩き・登山
- スポーツ
- 山菜、フルーツ狩り

- タケノコ
- イチゴ
- 春キャベツ
- 新ジャガイモ
- 山菜
- アスパラガス
- タマネギ
- そら豆

- ナシ
- 柿
- 栗
- ブドウ
- キノコ
- リンゴ
- サツマイモ
- 秋ナス

- 旅行
- 紅葉狩り
- 読書
- 温泉めぐり
- ウォーキング
- 月見
- 食べ歩き
- 山歩き、登山

冬木成 春去来有 冬より春去り来れば
不喧有之 鳥毛来鳴故 喧かぶりし鳥も来鳴きぬ
不開有之 花毛任家礼坪 開かざりし花も咲けり
山平茂 入布毛不取 山を茂け入りも取らず
草深 執手母不見 草深け執り手も見ず
秋山乃 木葉乎見而着 秋山の木の葉を見ては
黄葉乎落 取而曾思布 黄葉落取りを思ふ
青平者 置手曾歎久 青き手置手曾歎
曾許之恨之 秋山吾は ぞぞ恨め秋山吾は
冬か過きて春が来ると
鳴いていながら鳥もさきどり
咲いた花も咲く
けれど山には木が生い茂り入って採ることもできない
草が深く、手にとりて見ることもできない
秋山は木の葉を見よう、
もみちを手にとりて思える
また春の息吹の落ちたのちと思いつく
残念だが秋は山人秋山がすばらしいのを秋と選ぶよ
天竺の草と藤の花と 万葉集巻16 秋の心



ヨモギ (キク科)



ツユクサ (ツユクサ科)



ノジグク (キク科)



リョウノウギク (キク科)



百代草

お父さん お母さん 屋敷の後ろに生えた
百代草のように百代まで長生きして下さい
私に帰るまで

父母が 殿の後方しりへ
百代草 百代いでませ
わが来たるまで

万葉集

父母が 殿の後方しりへ
百代草 百代いでませ
わが来たるまで

卷二十 4326
生壬部足国(みぶべのたりくに); 静岡県掛川市の防人

ノギク、ヨモギ、ツユクサ、マツ???
リョウノウギク? 樟脳の香り 万年青(オモト)?

その年の山野花の中で最後に咲く花であることも父母の長寿を祈る草としてふさわしい

古代、わが国に野生の小さな菊があり、「百代草」とよばれていた。それが中国に渡り、長い年月をかけて今日のような大輪の菊に改良され、平安時代に我が国に里帰りした。懐風藻に歌われた「菊」は野生の菊ではなく「家菊」であり、万葉人は中国で描かれた絵画や漢詩から学び、実物はまだ知らなかったのではなからうか?

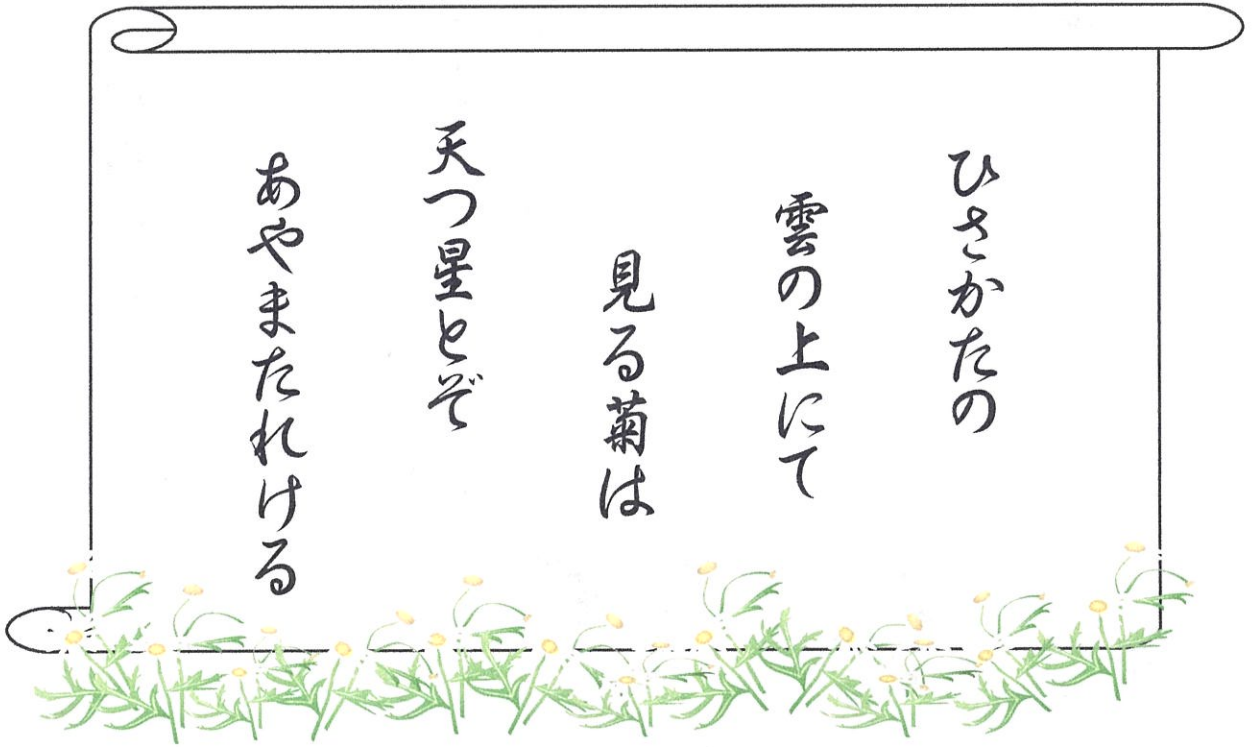
ひさかたの

雲の上にて

見る菊は

天つ星とぞ

あやまたれける



古今和歌集

巻五 秋勅下 二六九

ひさかたの雲の上ぞみる菊は

天つ星とぞあやまたれける

藤原敏行

宮中の殿上から見る菊は星と見間違ふほど美しい

当時としては、菊は珍しい。

身分の高い人しか見る機会が無かたのだろう。

普段、見ることの少ない菊の花の美しさを詠んでいる。

ひさかた宮中にあがれたのぞ、宮中を賛美

和歌を詠く媚びへつらい？

十一月に「古典菊展」実施
国立歴史民俗博物館 くらしの植物苑

古典菊は江戸時代に入ってから
肥後菊、伊勢菊、松坂菊、奥州菊、江戸菊、



ではない

「鶉衣」横井也

元禄15
1702
1783
天明3

非文集

一年松木 淡々己れ高ぶり 人を慢ると伝へ聞え

初めて対面して化物の正体見たり 枯尾花

其の誠なること大概この類なり

化物の正体見たり 枯尾花

← 幽霊の正体見たり 枯尾花

疑心暗鬼に陥った心境下では、同じなびく枯尾花のようには
何でもないものも怪しげに思え幽霊のようだった。知らない
ものと思え、さう見違えてさう

与謝蕪村

享和
1716
1784
天明3

蕪村日記

狐火の燃えつくばかり 枯尾花

夜の野原にて風に揺らめく枯尾花
怪しく燃え盛るこの世のものなぬ狐火のようだ

ことわざ

「鶉衣」横井也

尾花 || ススキ ↓ 枯れ芒 (かれすすき)

『幽霊の正体見たり 枯れ尾花』
疑心暗鬼の状態
恐怖心や疑いの気持ちがあると、何でもないものまで恐ろしいものに見えることのとえ。
また、恐ろしいと思っていたものも、正体を知ると何でもなくなるということのとえ。
風揺れるススキを見て、幽霊と見間違う

←
夜の野原で風に揺れる枯れススキを、この世のものならぬ狐火に譬えて詠んだものである。
穂の出たススキは中秋の名月に収穫物と一緒に供えられるが、これには収穫物を悪霊から守り、翌年の豊作を祈るといいう意味が込められている。

狐火の燃えつくばかり 枯尾花

与謝蕪村

秋の野に 咲きたる花を
かき数えれば 七種の花

指折り および

紅紫

紅

淡紅

黄

淡紅紫

ききよう

青紫

旋頭歌 (五七七く五七七)

萩の花

尾花 葛花

尾花 すずき

瞿麦の花

瞿麦 なでしこ

姫部志

姫部志 おみなえし

また 藤袴

朝貌の花

朝貌 おそがお

作者不詳

せりなすな

ききようはくべら

ほとけのざ

すすな すずしろ

これぞ春の七草

古代

『延喜式』(餅粥 望粥) 七種粥

米・粟・黍(きび)・稗(ひえ)・

みの・胡麻・小豆の7種の穀物

餅がゆは毎年一月十五日 一般官人には、米に小豆を入れただけの「御粥」これを食すれば邪気を払える

この風習は『土佐日記』・『枕草子』にも登場する。

『河海抄(かかいしよう)』1362年頃

(四辻善成による『源氏物語』の注釈書)

「芹、なづな、御行、はくべら、仏座、

すずな、すずしろ、これぞ七種」が初見

ただし、歌の作者は不詳



現代の暦の月日に換算

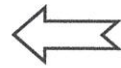
約三百年程度の単位で

平安時代 藤原道長 十月二十八日

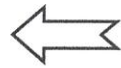


紅葉の盛り

鎌倉時代 藤原定家 十一月七日



江戸時代後期 頼山陽 十一月十一日



昭和戦後 高度成長期 十一月二十日以降



令和二年 紅葉 十二月初めの頃



二〇五〇年はいかに？



「You Tube」 配信

「主」漢字習 「冬」初

「冬の章」

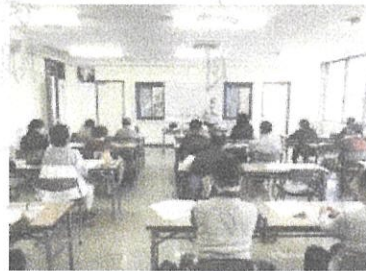
令和二年十二月十一日（金）茂原市総合市民センター

茂原市社会福祉協議会
ウェブサイトから

ガビン先生と楽しく学ぼう!日本の四季と古典文学を開催しました 秋の章 ~総合市民センター~

2020年11月13日（金）

古典文学について、ガビン先生のわかりやすい説明とユーモアたっぷりの表現で楽しく学ぶ事ができました。



山茶花	椿
10月～12月	12月～4月
毛が生える	無毛
完全に開花	半開き カップ状 完全に 開花しない
↓	↓
花びらが	花首からまるごと
散る	落ちる



椿

国産の木春の木
日本の用法
命の象徴

四季

冬

二十四節気

立冬

七十二候

(初中末)

初候

つばきはじめてひらく

「山茶始開」

中国では

「水始氷」

西本願寺本 萬葉集 卷一

文武
大寶元年癸丑秋九月太上天皇幸千紀國時歌

大正天皇御宇
撰歌集也

伊國

巨勢山乃列々椿都良々今見乍思奈許滿乃春野乎

右一首 坂門入足

朝美青木人々母亦打山行來跡見良武樹人友師母

右一首 謝首淡海

或本歌

河上乃列々椿都良々今難見安可受巨勢能春野者

右一首 春曰哉首老

九月十八日 (10/27)
※この歌から年月表記

↓ 十月二十二日

巨勢山の

つらつら椿

つらつらに

見つつ憇はな

巨勢の春野を

坂門人足

つらつら

一面に葉が茂り
連なっている様子

連なっている
たくさんさんの椿

じつと見る

熟視する様

よくよく見ながら

楽しもう

同行の人たちに呼びかけ

今、目の前に無い

偲ぶ(無いものを想像)

心の底から深く思う

椿が満開の

巨勢の春野を

旧巨勢寺

阿吽寺境内

昔から椿が多くある

椿は今
咲いていない
思い浮かべる
想像の世界



奈良県御所市(ごせ)古瀬

持統天皇(祖母)が
文武天皇(孫)と共に
紀伊の白浜温泉へ旅する(行幸)

おそらく治療のため?

河のうへの

つらつら椿

つらつらに

見れども飽かず

巨勢の春野は

かすがのくらびとのおゆ

春日蔵首老

詩人

初雪や水仙の葉 たわむまで

ばせを

「芭蕉年譜大成」

我が草の戸の

初雪見んと

余所にありても

雲だに曇りければ

急ぎ帰ること

あまたたびなりけるに

師走中の八日

初めて雪降りける よろこび

芭蕉43歳

貞享3年12月18日

(現在) 1/31

私の暮らしている庵で

初雪を見ようと

外出していても

空が雪雲で暗くなると

急いで帰宅することが

何度もあった

師走(十二月)中の八日(18)

初めて雪が降った うれしさ

待ちに待った初雪が降ってきた

雪の重みに耐えかねて

水仙の葉が

折れ曲がっている



水仙

平安時代に中国から渡来

仙人のように寿命が長く清らか

中国の古典からは

「天仙」・「地仙」・「水仙」

地中海沿岸が原産である

シルクロード?

文学作品には

中世以前に出てこない

水仙Ⅱ「雪中花」Ⅱ「雅客」

しがの山ごえにてよめる

志賀越道を越える際に詠んだ

崇福寺の近傍を経て滋賀里へ出る
(滋賀県大津市)

白雪の

白い雪が

雪 Ⅱ 冬の華

雪を好意的に見ている
「雪の華」 Ⅱ 古典的感觉

所もわかず

ところまわず
どこへも分け隔てもなく

降りしけば

降りしきる
絶え間なく降る

地上一面が雪にはならない
降り積もった雪になっていない

いはほ
巖

巖 Ⅱ 高くそびえる

巖にも咲く

白い花が
岩の上にも咲いている

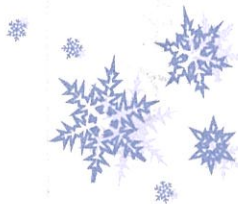
岩の上にも花が

岩に降り積もった雪を見て
岩の上にも白い花が咲いている

花とこそ見つれ

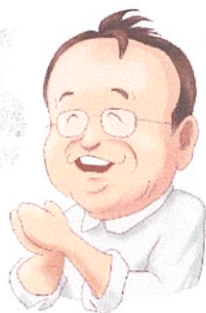
花かと思えた

花など咲くはずのない



① 講座を終えての感想

- ・ 現代はとても便利だが、時間に余裕がなく、季節さえ楽しむ気持ちも忘れていた。
- ・ 平安時代より私たちの時代に対する知識の動きや自然を愛でる感覚を呼び覚まされて、おもしろかった。
- ・ 参加している皆様の古典に対する知識のすごさに感心した。
- ・ 日本には美しい景色、花がたくさんあり、幸せだ。(てぬぐいも美しかった)
- ・ てぬぐいがきれいだった。
- ・ 和歌にはリズムもあり読みやすく、かつ無駄がなく、また頭文字がかかっている、おしやれ。
- ・ 日本文化は本当に美しいと実感した。
- ・ 今後折にふれ、古典の世界に触れていきたい。
- ・ 苦手としていた古典文学の世界に学ぶことができて良かった。
- ・ とても奥深いものと感じた。
- ・ 古文とは学生時代に少し学ぶ程度だった。この度の学習で、とても興味を持った。
- ・ 久しぶりで文学に触れました。遠い昔に戻ることができ、楽しいひとときだった。
- ・ 四十年ほど前に高校で手背物語の「かきつばた」を暗記したことを思い出した。
- ・ 大学時代は専門は国文学ではなかったが、高校時代に古文は好きだった。
- ・ 花の様子も時代とともに変化していることがわかった。
- ・ わかりやすい講話で楽しかった。
- ・ わかりやすい講義だった。次回も是非と思う。
- ・ 楽しかった、わかりやすかった。
- ・ 毎回楽しく聞かせていただいている。とても楽しかった。
- ・ とても楽しい授業で学生に帰った様で、わかりやすく楽しく勉強させていただいた。
- ・ 初めての受講、とても面白く、わかりやすい。
- ・ 初めて講座を受けさせてもらい、わかりやすく楽しかった。てぬぐいの花も良かった。
- ・ わかりやすく話していただき、とても楽しかった。
- ・ 楽しく1時間30分が過ぎてしまった。
- ・ 久しぶりの講座、学生時代習ったと思うが忘れていた。(笑)
- ・ 楽しく時間を過ごすことができ、参加して良かった。
- ・ とてもわかりやすく楽しく、古典が身近に感じられる。すばらしい内容だ。
- ・ 話の内容がわかりやすく楽しく受けることができた。
- ・ 肩がこらず、こういう講座が若い時に受けていたら、もっと古典が好きになっただろう。
- ・ 知識不足で発言することができなかった。これからの生活の中に取り入れていきたい。



- ・ これからの講座に期待する。
- ・ 次回も期待している。
- ・ 次回も楽しみにしている。
- ・ 茂原での古典講座、これからも長く続けてほしい。
- ・ 楽しい講座で毎回楽しみにしている。
- ・ 今後、色々なものを学んでみたい。
- ・ 7月にこれなかったのが残念だった。
- ・ 自分の都合に日程が合うことを祈るばかり。
- ・ 万葉集を自分でも読んでみたい。
- ・ 古典オンチの私だが、先生の講座で「目からウロコ」、来年もぜひお願いしたい。
- ・ 先生に教わった生徒は幸せだったと思う。
- ・ 息子が中学時代に国語の時間に使用した先生のお手製の教科書を思い出した。
- ・ 本物を見ることで、改めて文化のすばらしさを実感できた。子どもの頃にそんな体験ができる子は幸せだと思う。

②

△ 今後、学びたい、古典に関すること

- ・ 古典の後ろにある知識をいろいろ教えてほしい。
- ・ 中学高校で学んだ文学作品をもう一度学んでみたい。
- ・ 花を学んだ。他の食べ物、自然物も知りたい。
- ・ 古典の本が物語にどう取り上げられているのかも知りたい。
- ・ 作品
- ・ 「古事記」
- ・ 「万葉集」 花に関して
- ・ 「伊勢物語」 業平を詳しく知りたい。
- ・ 「枕草子」
- ・ 「更科日記」 千葉県に関わりのある古典について学びたい。
- ・ 「平家物語」 源平の合戦で敗れた平家の公達のうたなど解説していただければ。
- ・ 「新古今和歌集」
- ・ 「梁塵秘抄」 (前回)
- ・ 「歎異抄」を学びたい。
- ・ 「徒然草」
- ・ 「奥の細道」 松尾芭蕉

俳句

以上 令和二年十一月十三日実施



香野 藤雅





ガビン先生と

楽しく

学ぼう

日本の

古典文学

第二卷

2

⑤ 令和三年 五月二十八日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」
その1 かいひ・昆虫食

⑥ 令和三年 六月二十五日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」
その2 酒

⑦ 令和三年 六月二十五日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」
その3 酒

⑧ 令和三年 六月二十五日(金)

「日本の古典文学+ちよつと裏話」
その4 酒

テーマは

「食」

ガビン先生と
楽しく学ぼう！

「日本の古典文学」

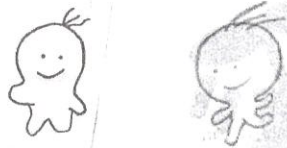
十時とウラ話

古典から見える昔の食生活

その上

令和三年五月二十八日(金)

十時 総合市民センター

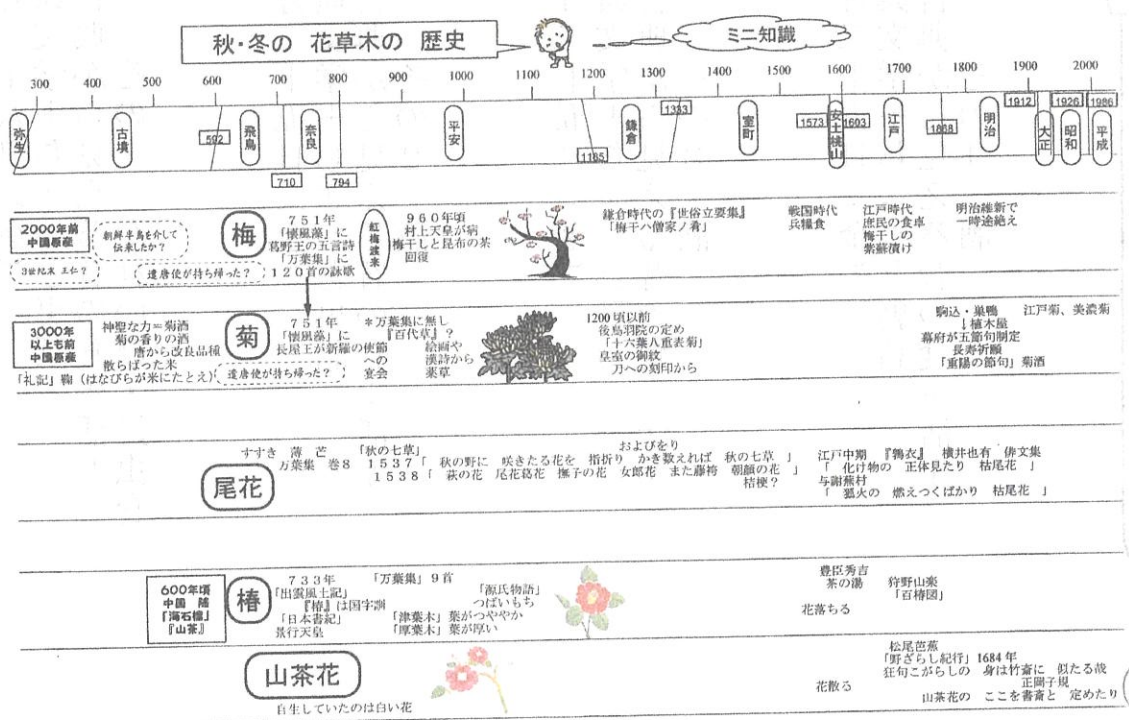


総合市民センター
☎(24)9511 FAX(23)7444
祝日、年末年始

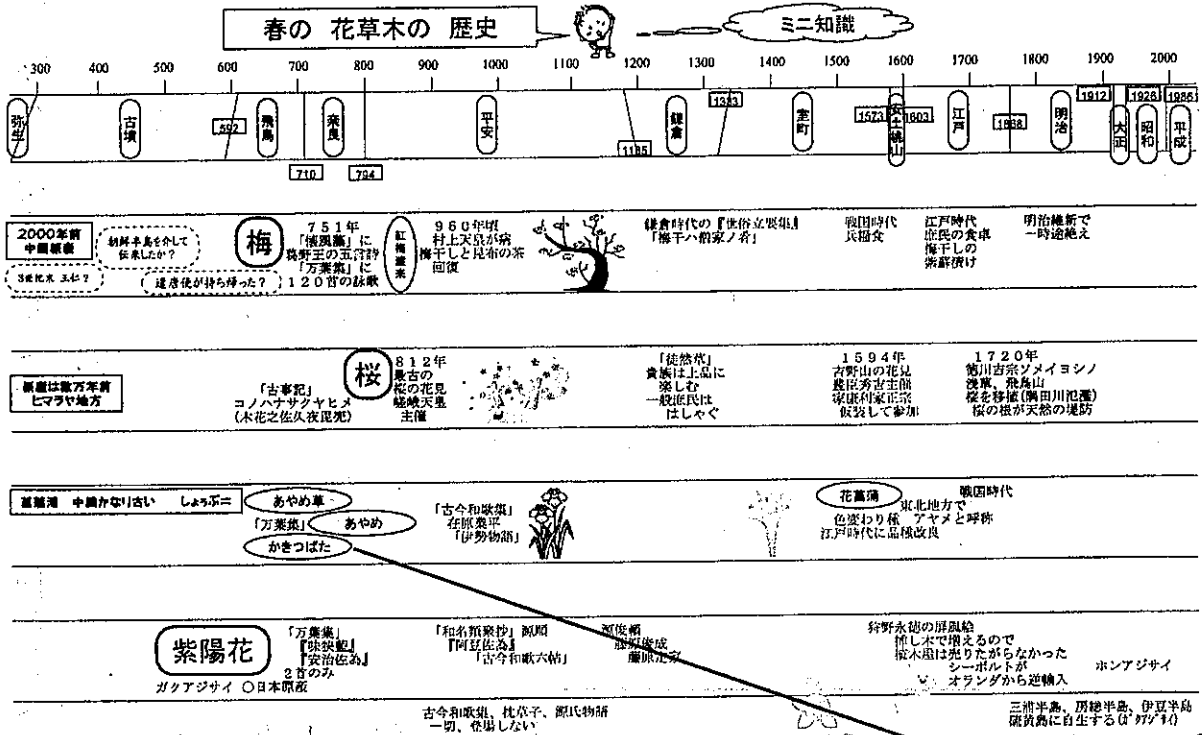
▼ガビン先生と楽しく学ぼう！
「日本の古典文学」+ちょっとウラ話
5月28日 ☎、6月25日 ☎ 10時～11時
30分/内容=古典から見える昔の食生活/講師=伊藤雅敏先生/対象=一般/定員=25人(申込順)/申込=4月22日☎9時～電話にて。土日も17時まで申込可



昨年度の古典文学講座で取り上げた
秋・冬の 花草木の 歴史



昨年度の古典文学講座で取り上げた 春の 花 草 木 の 歴 史



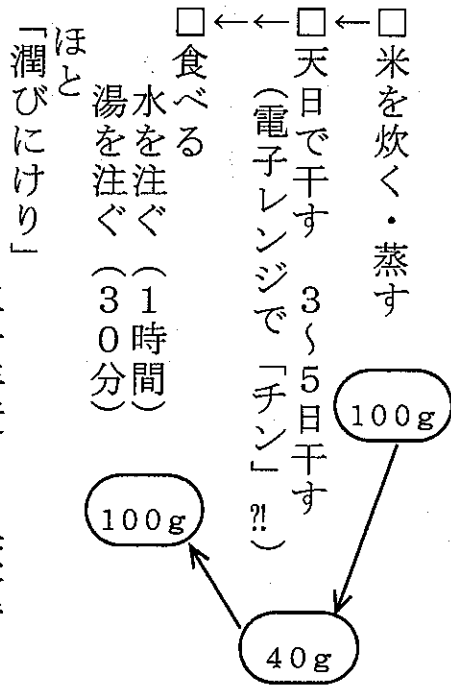
『伊勢物語』第九段 東下り

「かきつばた」の短歌を聞いた人たちは
都を思い 涙を流した
その涙が乾飯に落ちて 乾飯はふやけてしまった

乾飯

- ・奈良 餉 かれい かれいひ
- ・平安 枯飯 乾飯 かれいひ かれいひ
- ・鎌倉 糲 ほしい ほしいひ

今、作って見よう



二十年近くも保存できるらしい

五つの「伝 写本」を比較してみた … 使われている仮名の字が違う

武田本

天福本

尊鎮親筆本

御所本

嵯峨本

武田本

天福本

尊鎮親筆本

御所本

嵯峨本

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

から衣きつゝなれしはしあれし

武田本

天福本

尊鎮親筆本

御所本

嵯峨本

原本を元に 本を写して広まっていた
筆手の人の癖、解釈、思考によって完成

武田本

天福本

尊鎮親筆本

御所本

嵯峨本

武田本

天福本

尊鎮親筆本

御所本

嵯峨本

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

とよめたれもみなひかれひのうへ

『万葉集』 卷五 八八八 山上憶良

都禰斯良農 常知らぬ

いつもとは違う

常知らぬ道 冥土への道

道乃長手袁 道の長手を

長い道のりを

久礼々々等 くれくれと

暗闇の中に

西も東も分らない
暗い道をとぼとぼと

伊可尔可由迦牟 いかに行かむ

どのようにして行こう

私は行かねばならないのか

可利豆波奈斯尔 かりてはなしに

食べるものさえ無いのに

云 可例比波奈之尔

かれひはなしに

干飯も無いのに

乾飯(かれひ)

山上憶良が 奈良の都へと向かう 途中

大伴君熊凝くまこり(相撲使い 国司の従人となって) 亡くなった

熊凝の死を悼み 山上憶良が亡くなった熊凝に なりきって詠んだ歌

暗いあの世への道を行く不安を詠った

熊凝は 肥後国益城郡出身 十八歳で病氣になり死去

肥後国 熊本県

安芸国佐伯郡で亡くなる

安芸国 高知県

両親に会えず亡くなったことが恨めしい

さる程に 春過ぎ 夏た闌け 秋も深くて 冬ころの比にも なりしすば 日のうらくなる時

蟻 穴より 這い出いで 餌食を 干しなどす 蟬来たつて 蟻に 申すは あな いみじの蟻殿や

か々る冬ざれまで さやうに豊ゆたかに 餌食を持たせ 給ふものかな 我に 少しの餌食を 賜たび給へと

申しければ 蟻 答へて云く 御辺は 春秋の営みには 何事をか し給ひけるぞ といへば

蟬 答へて云く 夏秋 身の 営みとは 梢に うたふばかりなり その音曲に取乱し

隙なきま々に 暮し候 といへば 蟻 申しけるは 今とてもなど うたひ給はぬぞ 謡長じては

終ついに 舞うとこそ 承うけたまは 承れ いやしき餌食を求めて 何にかはし給ふべき とて穴に入りぬ

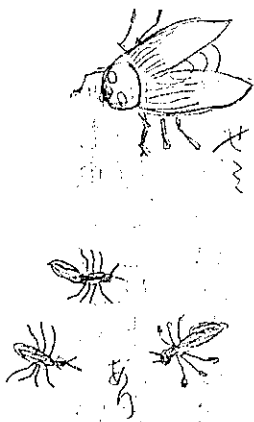
その如く 人の世の事も 我が力に及ばん程は たしかに 世の事をも 営むべし つゞまやかに

せざる人は 貧しうして 後に悔ゆるなり 盛んなる時 学がせざれば 老ひて後 悔ゆるものなり

酸のうち乱れぬれば 醒めて後 悔ゆるものなり

絵入 万延二年本

為永春水による 絵入古活字本



「キリギリス」 もとは 「アリとセミ」 そして 「アリとキリギリス」 さらに 昆虫食

□ B C 5 8 0 年頃 アイソホープス『イソツプ寓話』

北欧に話が伝わっていく

アルプス以北にセミはいない

キリギリスになつた

□ 古代ギリシヤ B C 3 0 0 頃 アリストテレス
セミを食べた記録 「羽化する前のが最もおいしい」

縄文時代 糞石に昆虫食の形跡

平安時代 薬物辞典
「本草和名」イナゴ

室町時代 宣教師

江戸時代初期 仮名草子『伊曾保物語』
世の中に広がる出版

1593年 文禄2 伝来
沖縄や奈良 焼いて食べる
信州 幼虫の唐揚げ

東南アジアでも同様の食べ方

中国
： 河南省 羽化の幼虫の素揚げ 塩をつけて食べる
： 山東省 煮付け 揚げ物 炒め物
： 雲南省 ゆでて すりつぶして セミみそを作る

『フアーブル昆虫記』 1 8 7 8 ~ 1 9 0 7

セミの幼虫 オリーブ油に塩ひとつまみ + タマネギ少々

フライにする

「エビの味がした」
「イナゴの串焼きに近い」

（政治的配慮が必要となる）

1934

デイズニー

↑ ルーズベルト大統領の社会保障制度

・ 話の流れに「アリが食べ物を分けてあげて、御礼にキリギリスがヴィオリン演奏」

2020・6/4 無印食品から 昆虫チップスの販売

キリギリスが「食料を分けてほしい」とアリの家を訪ねる



食べ物を あげる？ あげない？



アリは
「夏は歌って過ごしていたから、冬は踊って過ごせばいいんじゃない？」と言い、扉を閉めて追いつ返してしまいました。

そしてキリギリスは、そのままアリの家の前で凍え死んでしまうのです。

アリは
夏に馬鹿にされたことを根にもっていた？

← 皮膚で やり返したアリ

□ 後先を考えずに過ごすと 後で困る

☆アリは食べ物をあげる

×キリギリスは そのまま死んでしまう

※子ども向けの童話としては 日本ではそぐわない

○よってキリギリスは改心

キリギリスは泣いて感謝をし翌年から 勤勉に働くようになった

← 優しさが 手を変える

□ 困った人を助ける 優しい人になるべき

アリは
「夏は歌って過ごしていたから、冬は踊って過ごせばいいんじゃない？」と言い、するとキリギリスはこう答えた
「もう歌うべき歌はすべて歌った君は僕の亡骸を食べて生き延びればいいよ」

後先を考えず 遊んでいるだけに見えたが 実はすべてを見据えたうえで

← 生きている時間を 命がけて楽しんだ

□ 幸せの尺度は 人によって違う

日本の古典文学講座

ガビン先生と

楽しく学ぼう!

「日本の古典文学」

十ちもと裏話

古典から見える昔の食生活

その2

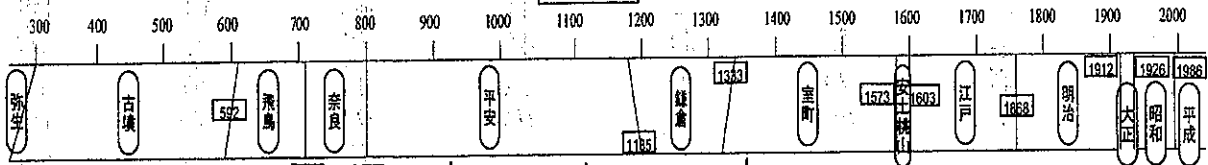
令和三年六月二十五日(金)

十時 菅原市総合市民センター



文学作品の時代はいつ?

今回の年表



古事記
712和編5
太安万侶が編纂
元明天皇に献上
勅撰?の史書
神代の天地創造
から
推古天皇の時代
神話や伝説も含む

風土記
713和編8
律令制度
の整備
日本国の統一
↓
各国の事情を
知るため
風土記の編纂
「続日本紀」
地方統治の指針
正式な公文書
「解」

万葉集
759天平宝字3
~780宝龜11
勅撰?
橘諸兄?
大伴家持?
万の言の葉
「古事記」
後葉に伝える
(後の世)
20巻
4500首あまり
天皇、貴族
役人、農民
民謡など
さまざまな人の
さまざまな歌

伊勢物語
910~
950??
在原業平を
思わせる男を
主人公にした
短編歌物語集
作者不詳
紀貫之?
能の演目へ
「井筒」
「雲林院」

大鏡
1070??
天皇や貴族など
について
年ごとに起きた
出来事や
エピソードを
書き記した
歴史物語
文徳天皇から
850 嘉祥3
後一条天皇
1025 万寿2
長命な老人二人
が雲林院の菩提
講で語り合い
若侍が批評する
対話形式で
話がすすむ

徒然草
1349??
兼好が
書いた随筆
吉田兼好
卜部兼好
兼好法師
244段から成る
兼好の
思索や雑感
逸話を多岐多様
にわたり
順不同に語る
隠者学
兼好は仁和寺が
ある双ヶ丘に
居を構える

本日のテーマは
酒

平家物語卷第一

祇園精舎の鐘の聲

祇園精舎の鐘の音には

祇園精舎乃鐘の聲

諸行無常の響きあり

万物は変転し 同じ状態とどまることはないという響きがある

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

沙羅双樹の花の色は

安羅雙樹の花の色

盛者必衰の理をあらわす

盛者必衰の理をあらわす

盛んな者も必ず衰えるという この世の道理を示している

たけき者もついに滅びぬ

おごれる人も久しからず

栄耀栄華におごれる者もそれを長く維持できないものではない

ただ春の夢のごとし

ただ春の夢のごとし

ただ春の夜に見る夢のようである

まさか風邪の前には同じ

たけき者もついに滅びぬ

勢い盛んな者 ついに滅んでしまうというのは

まさか風邪の前には同じ

ひとえに風の前塵に同じ

まさに風邪の前にある塵のようなものである

沙羅



仏教では
「生命の木」
若返り復活



✕ 散る
↓
落ちる

お釈迦様が旅の途中でお亡くなりになった
横たわった場所に2本の沙羅の木があった
お釈迦様の死を悲しみ真白な花を咲かせた
朝咲いた花は 夕には次々と散り
お釈迦様の上に舞い散り覆い尽くした

沙羅双樹

ナツツバキ

日本で代用

インド原産 高さ30mに達する

もともとは淡い黄色い花 → 春になると白い花を咲かせる

ジャスミンに近い香りがする

耐寒性が弱いので 日本では育たない 日本では温室が必要

酒

日本では

中国 2000年頃「三国志」にある

「古事記」 712 (和銅5) 酒の献上

「大隅国風土記」 713 (和銅6) 「口噛み酒」

村中の男女が生米を噛んでは吐き出して貯めた中に水を加え一晩以上おいて酒の香りが出たら飲む

「播磨国風土記」 716 (靈龜2) 麹カビの糖化作用

干し飯が水に濡れてカビが生えたそれをもとに酒を造る

「万葉集」 759 (天平宝字3) 濁り酒・黒酒・白酒

くろき しろき
糟湯酒・すみさけ
清酒↑平安時代
黒みがかった古代米酒 菩提寺に

「令集解」 868 (貞観10) 宮内庁に酒造所 60人の酒部を指示

「延喜式」 927 (延長5) 成る 967 (康保4) 施行

米と麴で酒造

「沽酒の禁」 1252 (建長4) 家一軒の酒壺の数の制限

酒に酔い事件を起こす

大宰帥大伴御讚酒歌十三首 萬葉集三

駿無物乎不念者一杯乃濁酒乎可飲有良師

酒名乎聖跡負師古昔大聖之言乃宜左

古之七賢人尊毛欲為物者酒西有良師

賢跡物言從者酒飲而醉哭為師益有良之

將言為便將為便不知極貴物者酒西有良之

中ノ尔人跡不有者酒壺二成而師鴨酒二梨宮

病醜賢良乎為跡酒不飲人乎孰見者猿二鴨似

価無宝跡言十方酒飲而情乎遣尔豈益日八方

夜光玉跡言十方酒飲而情乎遣尔豈若日八方

世間之遊道尔情者醉泣為尔可有良師

今代尔之樂有者来生者虫尔鳥尔毛吾羽成奈武

生者遂毛死物尔有者今生在而者樂乎有名

默然居而賢良為者飲酒而醉泣為尔尚不如来

大宰帥 大伴旅人卿が 酒を褒め讚えた歌十三首

大宰帥大伴御の酒を讚めし歌十三首

○ 駿なま、ものを思はずは一杯の濁れる酒を飲むへくあるらし

酒の名を聖と負せし古の大聖の言の宜しき

古の七の賢しき人たちも欲りせしものは酒にしあるらし

賢しき物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするし優りたるし

言はむすべせむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし

○ なかなかに人とあらずは酒壺になりにていかも酒に染けなむ

あな醜賢しきとすと酒飲まぬ人もよく見は猿に鴨似る

価なき宝といふとも一杯の濁れる酒に衣にまよめぬも

夜光る玉とふとも酒飲みて心を遣るにあにいかめぬも

世の中の遊びの道にたのしきは酔ひ泣きするにあるべかるらし

二世にし樂しきあらば来世には虫に鳥にも我まふかりなむ

生まるは遂にも死ぬるものにあらむ、二世なる間は樂しきをあらむ

もた居りて賢しとするは酒飲みて酔ひ泣きするにあはむかすけり

「 驗無物乎不念者一杯乃濁酒乎可飲有良師 」

しるし
驗なき

考えても仕方ない
何の甲斐もなく

ものを思はずは

物思いをしないで
物思いするくらいなら

ひとつき
一杯の

一杯の

にじ
濁れる酒を

濁り酒を

飲むべくあるらし

飲むのが良いらしい
飲むべきであるらしい

※ 中国文学を積極的に取り入れた

中国の竹林の七賢の故事

社会の束縛を嫌って世俗を棄て
竹林の中で酒や琴に遊び清談した

☆ 一杯の酒を飲む V 無駄な物思い

なんやかんやと思うなら
酒を飲んだ方がずっといい

「 中、尔人跡不有者酒壺二成而師鴨酒二染嘗 」

なかなか

なまなかに

なまじつか
中途半端に

人とあらずは

人間であるよりは

さかつぼ
酒壺に

酒壺に

なりにてしかも

成ってしまいたい そうしたら

酒に染みなむ

酒に浸ひたってられるだろう

形式ばかりを 重んじる 真心の無い生活



理想 酒を飲んで 心のままに 生きる生き方

◎酒壺になって いつも酒に浸ひたってられる

『大鏡』 冒頭

ふいけあるを其院のふいけうま

まうてしゆるるハ、まうい乃人ありハ

あよなてやーおいうあてまわら

あきれゆたり、とむかともあひて

おま、とつろよぬぬりあふれり

おれやうなるもれくふななと見ゆ

あれらうちぞらひ見うりていふや

・老人二人
おおやけのよつぎ 大宅 世継 世次 190歳
なつやまのしげき 夏山 繁樹 重木 180歳

先つ頃 雲林院の菩提講に

詣でて侍りしかば 例人よりは

こよなう年老い うたてげなる

翁二人、^{おうな} 嫗と いきあひて

同じ所に居ぬめり 「あはれに

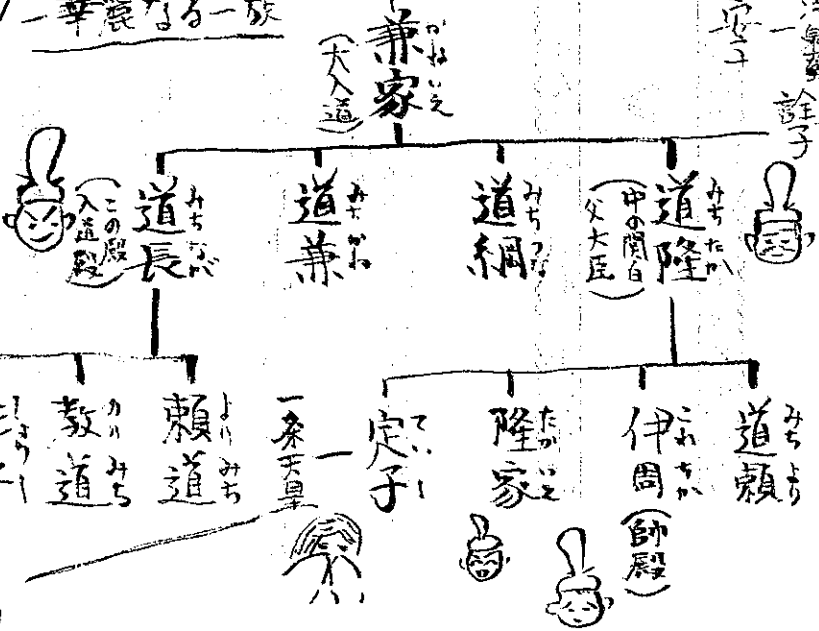
同じやうなるものゝ さまかな」と見侍りしに

これらうち笑ひ 見かはして言うやう

楽しく笑いつつ 昔の話を 話し始めた

藤原氏の 「華麗なる一族」の ドロドロの人間関係

藤原氏系図



『大鏡』 歴史を明らかに 映し出す優れた鏡
世継物語 (八五〇—一〇二五) 十四—一七六頁
文徳天皇 第一系天皇
道長の栄華が軸

つれづれなるままに

碓にむかひて

心にうつりゆく

よしなしごとを

そこはかどなく

書きつくれば

あやしうこそ

ものぐるほしけれ

日暮らし

碓に向かつて

心に浮かんでは

消える

とりとめない

ことを

とりとめもなく

これといつたつもりなく

書いていと

何としても

おかしくなってしまう

正気を

失っているようだ

一日中

つれづれぐさ

第175段

酒に酔う 酒を誘う あきれ果てた姿

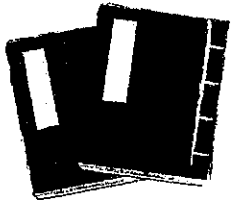
ガビン先生と楽しく学ぼう！

「日本の古典文学」+ちよっとウラ話

古典から見える昔の食生活その3

令和三年十月十二日(金) 10時
 十時 夜祭系総合市民センター

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！
 「日本の古典文学 食生活編」
 +ちよっとウラ話
 11月12日(金)、12月10日(金)10時~11時30分
 /内容=古典から見える昔の食生活/
 講師=伊藤雅敏先生 / 対象=市内在住者/
 定員=25人(申込順) / 申込=10月22日(金)9時~電話にて(土日17時まで申込可)



香野 藤雅

テーマは

にぎりいひ

初出「常陸風土記」筑波郡

『風俗説云握飯筑波之國』
くにぎり ことばにぎりいひ
 風俗の説に「握飯 筑波之國に云ふ
 訛りで「握飯」筑波の国で言う

地元では「にぎりめし」の国と呼んでいた

おむすび

「古事記」

かみむすびのかみ
 神産巢日神 … 稲に宿る

たかみむすびのかみ
 高御産巢日神 … 万物の生みの神

人と人との良縁を結ぶ

神様へのお供え物

山を神様に見立てる風習
 山は神様が宿りやすい形
 三角形の山のような形

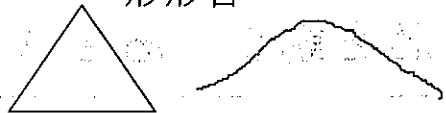
生み出す
 ムス + ヒ

神靈

↓
 ・ムスコ
 ・ムスメ
 神の授かり物
 貴族の女性たちの呼び名

お米を握って詰めたもの
 農民たちの呼び名

三角型 俵型 丸型
 笹の葉など何かに包んで作った可能性あり



屯食

「類聚名物考」(江戸時代の百科事典 一七八〇年過ぎ)

「類聚雜要抄」にも同様の記述あり

・盛屯食 木型などで打ち抜いたもの(一種類のみ:米)

・荒屯食 型無しに盛ったもの(様々なものを混ぜた)

☆甑こしきで蒸した米(強飯)を大きく楕円形に握ったもの

※鳥の卵の形に似ていたので鳥の子とも呼ばれていた

宮中での催し物があるときに御所の宿直とのゐや下級役人へ与える食べ物

「源氏物語」桐壺 第三章 第六段 源氏元服の場面にも『屯食』の記述あり

屯食(とんじき)

握飯(にぎりいひ)

にぎりめし

お握り(おにぎり)

結び(むすび)

身分上

↓ 江戸時代に『屯食』と呼ぶ

おむすび 女性の関与

有職故実

1843 「貞丈雑記」『今も公家方にては握り飯をどんじきといふ由 京都の人物語せり』

強飯を握り固めて鶏卵型にしたもの

1846 「松屋筆記」随筆 屯食の項 『公家にては今も にぎりめしを ドンジキ といへり』

1870 「守貞漫稿」『にぎりめし 古は とんじきと云う 今 俗式』

おむすびは元々女房詞 お+むすび

2000年前

弥生時代中期 杉谷チャノバタケ遺跡 (石川県能登半島中央)
高地性環濠集落 縦穴式住居の壁際に炭素化した米粒の塊

粽状炭化米塊 人間によって握られた痕跡
蒸した米 ↓ 焼く ↓ 粽に近く握った

3c 弥生時代後期 北金目塚越遺跡 (神奈川県平塚市)

高床式住居跡 ； おにぎり (握飯) 状炭化米 籠に入っていた

この時期以降

土器 (米と水) を加熱

← 沸騰したら吹きこぼれる

土器を傾けて湯を捨てる

← さらに加熱

土器を横にして上部にも火を通す

← 完成 粘り気が無い 握れない 握るのに苦労

5c後～6c後

1400年前

古墳時代後期 北川表の上遺跡 (神奈川県横浜市港北ニュータウン)

縦穴式住居 ； 握り飯とされる炭化米

最大15cmの大きな塊 3個発見 弁当箱に収められて出土

平安時代 大型の楕円形 (米一合半) 蒸したモチ米

鎌倉時代 握り飯 うるち米を炊いた

↓ 握り固めた
↓ 焼いて固めた

戦場における携帯食 (一合の米で一個作る)

江戸時代 元禄年間に海苔の養殖が盛ん ↓ 四角い板海苔を貼り付けると手も汚れない 公家社会では屯食

☆NHK 「日本人のおなまえ」 (柳田園男の説)

「さるかに合戦」おにぎり 「はさみやすい」鬼切り : 魔除けの効果

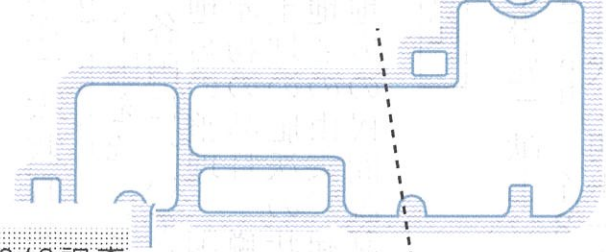
「おむすびころりん」おむすび : 心を魂に込める 「呪術的」心臓の形 転がりやすさ

「御伽草子」口承文学から



〔現代考〕

ハワイ、ブラジル
「MUSUBI」



2013調査
平成25

おむすび：10%

おにぎり：89%

沖縄：おにぎり・握り飯
九州：おにぎり・握り飯
中国：おむすび
和歌山：おむすび
日本：おにぎり

近畿：おにぎり 優勢

東日本：おむすび
青森：おむすび
栃木：おむすび
中部：おむすび

〔形の文化〕

東北



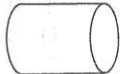
太鼓型
葉で焼く

関東



三角型

関西



俵型
兵庫県の駅弁

中国四国



爆弾型
沖縄は中に魚のすり身入り

- 1/17
おむすびの日
阪神淡路大震災
ボランティア支援から
- 6/18
おにぎりの日
石川能登
米←十+八

※ 山口：45%
広島店38%

現代文

+ 解釈

白文

書き下し文

訓読文

白文

筑波の國の地元では「にぎりめし」と呼んでいた

訛り^{なま}で「握り飯」筑波の國で呼んでいる

くにぶりのことばにつくばのくににいふ

風俗の説に握り飯筑波の國に云ふ

風俗ノ説云フ二握飯筑波之國一ニ

風俗説云握飯筑波之國

「常陸風土記」から

古事記

681

天武天皇が編纂の命 (詔)
(天武10) 帝皇日繼天皇家の系譜
先代旧辞系譜以外に伝わる昔の話

みことのり

712

「古事記」献上 太安万侶が元明天皇に献上
(和銅5) 正月23日 稗田阿礼が誦習

(文字資料の読み方に習熟)
暗誦では無い系譜全文を読む

上つ巻…序・誉めて抱きしめる神話
中つ巻…初代 神武 十五代 応神
下つ巻…十六代 仁徳 三十三代 推古

風土記

713

「風土記」太政官発令 風土記編纂の官命
(和銅6) 6月3日

全国を統一した大和朝廷が
各国について知る必要があった
地名の整理 国、郡、郷 好き字を用いる
産物の品目 税のための基礎資料
土地の肥沃の状態 農作物が良くできるか
地名の由来、起源
地方の民間説話、習俗、歌謡等 多く盛る

日本書紀

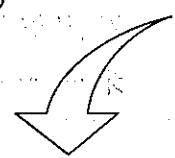
721

「日本書紀」献上 元正天皇に舍人親王が献上
(養老4) 5月 全30巻十系図1巻 帝紀と旧辞

大安万侶も

神代(四十一代)持統

臣連伴造百八十部並びに公民等本紀



天地初發之時

アマツチのハジメのトキ

於高天原成神名

タカマノハラニナリマセル
カミメナハ

天之御中主神

アメノミナカヌシノカミ

次高御産巢日神

ツギニタカミムスビノカミ

次神産巢日神

ツギニカミムスビノカミ

此三柱神者

コノミハシラノカミハ

並獨神成坐而

ミナヒトリガミナリマシテ

隱身也

カミナカクシタマヒキ

冒頭

風土記(古風土記)

現存するのは五

内容・文体としても文学性が高い
「解(げ)」律令制において

下級官僚から上級官僚に提出
正式な公文書

715 「播磨國風土記」 兵庫県南西、赤穂
(靈龜元) ・神話

721 「常陸風土記」茨城県
(養老5) 藤原宇合(馬養)うまあい
藤原不比等の三男 編纂に関わる

長屋王の変にて功を立てるが不遇
「懷風藻」に多くの作品がある

733 「豊後國風土記」大分県
藤原宇合(馬養)うまあい

西海道節度使として太宰府着任
十ヶ月で九州の全風土記を完成

内容として記紀とは異なる
・神話 国引き

733 「出雲國風土記」
(天平5) 聖武天皇に献上

かみやげのおみかなたり
神宅臣金太理

内容として記紀とは異なる
・神話 国引き

733 「肥前國風土記」佐賀県、長崎県
・神話

桐つき

「源氏物語」冒頭

桐つき

いつき乃御時あり女御更衣あまた

いづれの御時にか女御更衣あまた
さふらひ給けるなかに

なまはくはあはれなり

いとやむごと
なきはにはあらぬが
すくれてとき

めき給ふありけりはしめわれは

めき給ふありけりはしめわれは

とおもひあかり給へる御かた

とおもひあかり給へる御かた
めさましき

ものにおとしめそねみ給

ものにおとしめそねみ給

より下臆うの更衣たちは

より下臆うの更衣たちは
おなしほとそれ

ましてやすからす

ましてやすからす

どの帝の御代であろうか 女御や更衣が大勢
お仕えなさっていた中に たいして高貴な身分
ではない型で 特別に帝の御寵愛を

受けていらつしやる方があった 宮中に出仕する最初から自分こそは
帝の寵愛を受けようと気負っておられる方々はこの方を軽蔑したり
妬んだりなさる 同じ身分や
それより低い地位の更衣たちの人は さらに気がきではない

父：花山天皇に漢文を教えていた家庭教師
ただ出世とは無縁の貧乏貴族

兄：Xダメ

紫式部：○優秀

970~
978誕生

25~27歳

結婚

↓

999

女児出産

高齡出産

紫式部の結婚生活は3年

藤原宣孝

50~55歳

↓

1001
死去

紫式部の結婚生活は3年

平安時代の寿命

平均27歳

(貴族)

当時の健康状態

- ・運動不足
- ・若年出産
- ・結核感染

医療は薬、治療なし

栄養失調の状態

肉を食べないため

シングルマザーになって... 「源氏物語」を書き始める

1008~
1010頃

宮中の暮らしの様子 + ドロドロの人間関係

藤原道長の娘
彰子(当時13歳)

入内

藤原道長

注目

世に広まる

←

←

←

←

←

←

←

←

一条天皇
「文学好き」

男子出産
(後の後一条天皇)

(後の後一条天皇)

1012

官仕えを辞める

「源氏物語」完成

6年かけた

宮仕えの体験を元に
80年分の物語を書く

1014~
1030頃
死去

「紫式部日記」
先輩でライバルの清少納言に
対して批評

いつも得意満面嫌な奴漢字をよく間違える
人より優れていると自意識過剰過信
この女の行く末は絶対に悪くなる

復帰

←

←

←

←

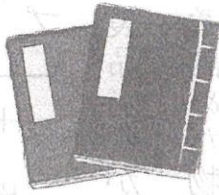
←

←

←



▼ガビン先生と楽しく学ぼう！
 「日本の古典文学 食生活編」
 +ちょっとウラ話
 11月12日(金)、12月10日(金)10時～11時30分／内容＝古典から見える昔の食生活／講師＝伊藤雅敏先生／対象＝市内在住者／定員＝25人(申込順)／申込＝10月22日(金)9時～電話にて(土日も17時まで申込可)



香野 藤雅



十時 女系市民やまー

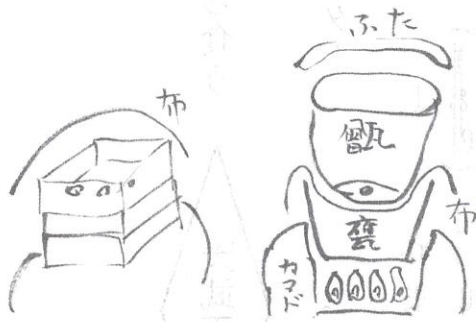
令和三年十二月十日 金曜日

その 4

「日本の古典文学」十七時とウラ話
 ガビン先生と楽しく学ぼう！

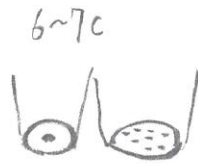
古典から見える昔の食生活

① 「甑」(こしき)



米を蒸したものを強飯(こわいひ) 米を炊いたものを姫飯(ひめいひ)

「甑」…土器でできた蒸し器
 ↓
 後に木製、竹製になる
 ↓
 さらに底にスノコを置いて「蒸籠(せいろ)」



6~7c
 穴は一つ 底部に 簾(かま)を敷く その上に米を入る
 穴は一つ 簾(かま)を敷く その上に米を入る
 おそらく祭、祝いなどに 特別のときに使われた 餅づくりのため
 古墳時代中期 出土量が衰(か)へた
 日本に伝来
 古く中国で発祥
 火(か)を蒸すための土器

ガビンが間違えていたこと・皆さんから教わったこと
 知らなかったこと・わからなかったこと

② 「団茶」

中国のお茶の一般的時代に
 450年頃 宋の時代に
 用いられた
 平安時代 遣唐使として 僧が中国から 持ってきた
 嵯峨天皇中心 宮廷貴族たちに 愛飲された
 形としては 円型 方型 四角型 銭型 等々ある

奈良時代の食事

食事の二極化

貴族

庶民

*一日2食 手づかみ・茶碗を持たない
味を付けない

- 玄米
- ゆでた野菜
- 海藻のスープ

+ 塩を舐めながら食う

乳目製品が豊かさのバロメーター

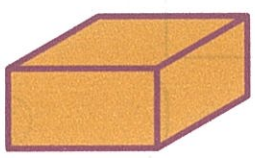
○蘇「牛乳を煮詰めた物」
税(貢物)

一斗 ↓ 一升まで煮詰める
10ℓ (18ℓ) ↓ 1ℓ

○牛乳 熱を加えてから飲む
腹下し防止



○雑穀(粟・稗) ↓玄米を作る
税(貢物)
○肉(猪・鹿)
動物性タンパク質は豊富



茶褐色の
チーズ?

竹簡 ↓ 木簡 「常食菜甚悪」
「いつもの食事のおかずは、まずい」

草木子

艸+果物 || 木になる実 ∴甘みが摂れる身近な植物

最高のぜいたく 庶民が食べることは無い

加工菓子 || 大豆餅・小豆餅・

+油 ↓ 床餅・煎餅・索餅

□「万葉集」 卷十六 三、八五三

石麻呂尔

いはまろに

石麻呂に

石麻呂さんに

吾物申

われものまをす

吾れ 物申す

申し上げますよ

夏瘦尔

なつやせに

夏瘦せに

夏瘦せに

吉跡云物曾

よしといふものぞ

吉しといふ物ぞ

良いそうですから

武奈伎取喫

むなぎとりめせ

鰻とり食

鰻を食べて下さいな
召し上がってよ

①縄文時代 約5000年前

貝塚から
うなぎの骨が出土
うなぎを食べていた

②奈良時代

大伴家持が吉田連老へ
友人に向けて歌う
字を石麻呂という
鰻を食べると奨めた
？夏瘦せを笑い、
もともと瘦せていたらしい
滋養の強化

③平安時代

貴族の中では、鰻は白蒸し+塩味
薬として書物に記載あり

④鎌倉時代

1399 (応永六年)
「鈴鹿家記」

鰻をぶつ切り
筒状に切る



串刺し
あぶる



+塩
+酢みそ
+辛子こそ

⑤室町時代

蒲焼きの原型



蒲の穂に似ている +醤油・酒・山椒味噌

⑥江戸時代

天保年間 : 千葉県銚子市のヒゲタ醤油が
濃い口醤油を新しく作り上げた
1781 ~ 1789
タレで味付け
現在の蒲焼きが誕生

菓菓子

※奈良時代から

○平安時代

〔春〕

梅子・枇杷木

〔夏〕

李子・梨

〔秋〕

〔なつめ〕もも 〔むべ〕郁子 (あけびの一種)・生柿・栗子・瓜 (まくわうり、うりぼう)

〔冬〕

〔こうじ〕くるみ 柑子・胡桃

加工菓子

十甘味料

・蔗糖 菓

・蜂蜜 菓

・糖 (飴)

・甘葛煎

〔種々菓帳〕正倉院 サトウキビから精製

〔続日本紀〕雑菓として納められていた

〔延喜式〕平安時代に貢進物として全国で養蜂が行われた

〔正倉院文書〕芋や穀物のでんぷんを糖化させたもの

〔枕草子〕ツタの皮をむく↓身をスライス↓採取した液を煮詰めた物

あまづらをかけたカキ氷

☆雑学

◎ 平安時代の美人の条件

- 艶のある黒髪
- 切れ長の細い目
- 下膨れした顔 (塩分取り過ぎ)

◎ 平安時代の動き

- 体を動かさない+
- 運動不足
- 膝歩き

梅

□「万葉集」 卷五 八二九 薬師張氏福子

烏梅能波奈 うめのはな

佐企弓知理奈波 さきてちりなば

佐久良婆那 さくらばな

都伎弓佐久倍久 つぎてさくべく

奈利尔弓阿良受也 なりにてあらずや

くすしのちよつしのふくし

梅の花

咲きて散りなば

桜花

継ぎて咲くべく

なりにてあらずや

梅の花が

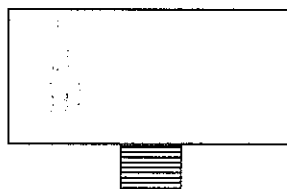
咲いて散ったら

桜の花が

すぐに続いて

咲きそうに
なっているではないか

※京都御所の紫宸殿の
前に植えられている



●左近の?

●右近の橘

□「古事談」 第六 一 「亭宅諸道」

南殿の桜の樹は もとは これ梅の樹なり 桓武天皇 遷都のとき 植ゑらるるところなり

しかるに 承和年中に及びて枯れ失せにけり よつて仁明天皇 改めて植ゑらけるなり

その後 天徳四年九月二十三日の 内裏焼亡のとき 焼け失せ了うんぬ

よつて内裏を造りたりける時 重明親王 式部卿家の桜木を 移し植ゑらるるところなり

件の木は もと吉野山の桜木と云々

橘の木はもとより生ひやどれるところなり 遷都以前は この知は 橘大夫家の跡なり

梅花の宴の歌三十二首

※参考 「古事談」：鎌倉時代初期の説話集 源頭兼

成立「一、二一二（建暦）〜一、二一五（建保三）
奈良時代から平安時代中期までの462の説話
全六巻 年代順配列 王道后宮・臣節・僧行・勇士
神社仏寺・亭宅諸道・

平安遷都

桓武天皇 梅の木を植えさせた↓枯れてしまった

仁明天皇 植え替えさせた↑ 960天徳四年 火事で焼失

☆「左近の梅」遣唐使の影響

重明親王（醍醐天皇の皇子）自宅の桜の木を移し植えた

★菅原道真

887 宇多天皇が十三歳で即位

891 1月 讃岐守↓ 891 3月 蔵人頭↓ 891 4月 左中弁↓ 892 12月 左京大夫↓ 894 中納言

901 1/15 藤原時平の策略
●菅原道真は政治の表舞台から消える

係長から三年半で
取締役まで出世

九州太宰府に左遷

梅を愛した

激減

梅の歌	
万葉集…	110
古今集…	18
桜の歌	
万葉集…	43
古今集…	70

□「後撰和歌集」

卷二 春中 五七

菅原道真

「後撰和歌集」上撰 九五七頃

さくらばな

桜花

桜の花よ

あるじをわすれぬ

主をわすれぬ

主を忘れない

ものならば

ものならば

ものならば

ふきこむかぜに

ふきこむ風に

太宰府に吹いてくる風に
(桜の花は咲きましたよと)

ことづてはせよ

ことづてはせよ

伝えておくれ



桜の木に伝えた

□「拾遺和歌集」 卷十六 雑春 一，〇〇六 菅原道真 「後撰和歌集」 上撰 一，〇〇七頃

こちふかば 東風吹かば 春になって東風が吹いたならば

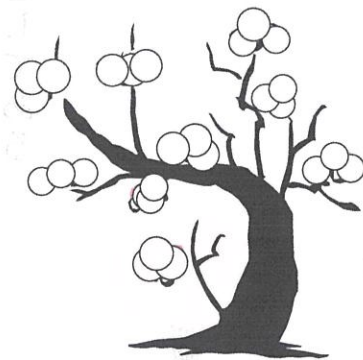
にほひおこせよ 匂い起こせよ 香りだけでも私に届けておくれ

うめのはな 梅の花よ (太宰府)

あるじなしとて 主なしとて 主人が居ないからといって

はるをわするな 春を忘るな 春を忘れてはいけないよ

1200 「大鏡」 春な忘れそ 春を忘れては 忘れないでね ぜったいにダメだよ



□「菅原伝授手習鑑」 人形浄瑠璃 文楽 1746 延享三 初上演 大阪竹本座にて

うめはとび 梅は飛び 梅は飛んで

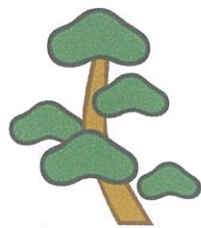
さくらはかるる 桜は枯るる 桜は枯れたという

よのなかに 世の中に そんな世の中であるならば

なにとてまつの 何とて松の どうして 松だつて

つれなかるらむ つれなかるらむ 何かするだろうよ

合作 竹田出雲・竹田小出雲 三好松洛・並木子柳



□「源平衰盛記」 (げんぺいせいしょうすいき) (読む) ↑ * 「平家物語」 (語る)

源順 『梅は飛び 桜は枯れぬ 菅原や 深くぞ頼む 神の誓いを』

◎ 菅原道真が かわいがっていた 三本の木

「桜」 後撰和歌集

なぜか桜は声を掛けてもらえなかつた
それを恨みつつ一夜で枯れてしまった菅原道真
悲しみでみるみるうちに弱り葉を落とし枯れてしまった

「松」

菅原伝授手習鑑
源平盛衰記
桜が枯れて梅が飛んだ
松も何とかするだろう

左遷された菅原道真の元へ飛んだが力尽きて着地した
無念のリタイア
兵庫県神戸市須磨区板宿
板垣八幡神社の境内に板垣の松がある

「梅」 拾遺和歌集
大鏡

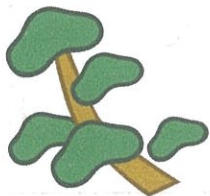
一晚で太宰府の地、菅原道真の居る地に見事に飛び降りた
ふんばった梅は太宰府のシンボルとなった
太宰府天満宮の境内に神木としてある

令和4年1月22日(土)
「朝日新聞に掲載」写真入り
太宰府天満宮で「飛梅」開花
菅原道真をまつる本殿側から
5輪ほどの花を咲かせた
八重咲きの白い花が春の
訪れを告げている
境内にある約6千本の梅の中で
真っ先に「飛梅」が咲き始めた



飛んだが

無念のリタイア



枯れた



平安時代の食事

地方の豪族の食事は健康的

○貴族

栄養面的にも一番
非健康的な食事 ↓ 要因
・仏教のしきたり
・平安時代中期以降から特に

食べる時間が決まっていた つまみぐいはダメ
食欲を否定されていた 喰い地が張る 悪いこと
・保存 遠方より搬送された 大食いはダメ

◇主食 白米：朝は粥

◇菜 (おかず) 味が無い十々調味料 (四種物) よぐさのもの

たとえば
カブ ← ダイコン
塩をなめて吸い物を食す
・酒 酢 塩
・醬 (固形のみそ) 高級品
塩漬け：海のもの
・(塩をなめて食べる)
・(三十五度ジャム状) 飲み過ぎてしまう

◇茶 (団茶 || 茶を固めたもの) 煎茶、抹茶

◇菓子 果物、蘇、削り氷、団喜 (椿餅)、唐菓子 (加工菓子)、牛乳

〔饗宴〕 据供御 (ながめるだけの膳 見る料理) : 塩を使って固定 体には悪い

召供御 (実際に 食べる料理) : 多くの死因
非健康的な人たちの集まり

・皮膚病 (不衛生が原因)
・糖尿病 (飲水症 酒の飲み過ぎ)
・脚気 (ビタミンB1不足 肉、大豆、野菜不足)

宇治拾遺集や今昔物語から

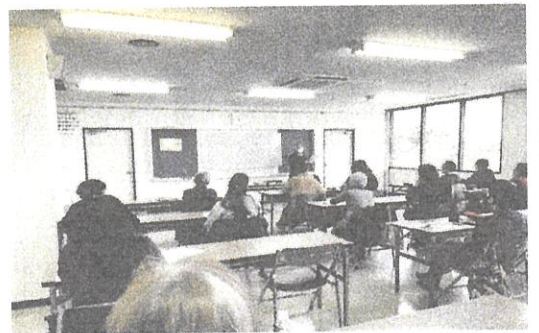
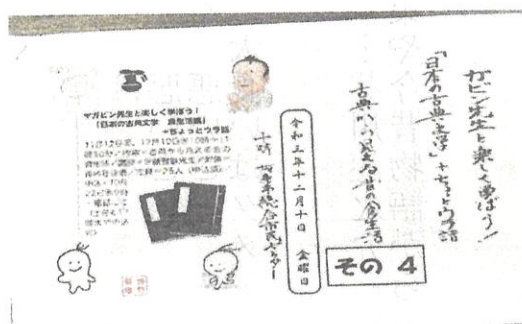
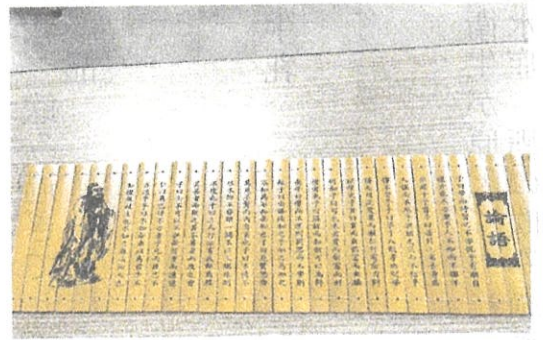
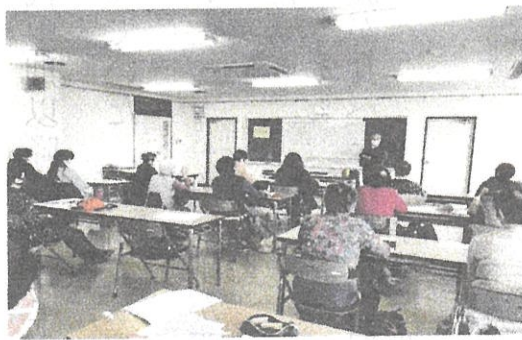
① 講座を終えての感想

日程 参加
 ・ 十時から十二時頃、時間は二時間くらいが良い。
 ・ 参加の皆様がすばらしい方々で、とても勉強になった。

全体
 ・ 楽しかったし、有意義だった。
 ・ もっと聞きたい。
 ・ 説明がわかりやすい。
 ・ とてもおもしろかった。
 ・ テーマが決まっていたので、
 ・ おもしろく興味深く聞くことができた。
 ・ 古典とは縁遠いものだったが、
 ・ とても楽しく勉強させてもらった。
 ・ あつという間の、楽しく和やかな時間だった。
 ・ 次回、楽しみにしている。わかりやすかった。
 ・ 今日もしろくで楽しい講座に出席するのが楽しみだ。
 ・ 楽しかった。
 ・ 今後もしろくで楽しい講座に出席するのを楽しみたい。
 ・ 話が巧みで
 ・ 興味をさらに深めるテクニックはすばらしい。
 ・ 資料をそろえてくれてありがたい。
 ・ 大変でしょうが、回数を増やして欲しい。
 ・ 楽しいので、何回でもOK。
 ・ 質問が活発に出て、おもしろかった。
 ・ 先生、お元気そうで何よりです。
 ・ 楽しかったです。お体を大切にしてください。

内容

・ 特に本日はイケメン発言もあり、いっそう楽しかった。
 ・ この時代の方は塩分取り過ぎで、
 ・ 高血圧の方も多かったと思っただ。
 ・ 古典が苦手でも昔の様子がわかって、大変おもしろかった。



② 今後は、学びたいこと（古典に関すること）

- ・再度、テーマ「花」がいい。
- ・今日の講座を含めて「食」を改めて学んでいきたい。
- ・生活の三要素（衣食住）とすれば、「食」について興味がある。
- ・世界文化遺産となった和食とつながった。「食」の文化に長い歴史を感じた。今後さらに学びたい。
- ・昔の行事などについて教えてほしい。
- ・行事。例えば花見、収穫祭、お正月などのしきたり。
- ・「住」
- ・「薬」「病」
- ・恋愛感情
- ・「万葉集」
- ・おまかせする。
- ・古典を読んでみたいので、古い文字の読み方を習いたい。

以上 令和三年十二月十日実施

空青み

菜の花とはよ 咲かせよか

桜吹雪も 今は昔に

